

19世紀イギリス文学合同研究会準備大会プログラム

ディケンズ・フェロウシップ日本支部・日本ワイルド協会
日本ギヤスケル協会・日本ジョージ・エリオット協会・日本ハーディ協会

2021年9月18日(土)12時30分開始
オンライン(Zoom)開催

研究発表

第1室

第1発表(12:30~13:10)

『『サイラス・マーナー』における農村共同体と
イングリッシュネス』

司会:金子幸男

(西南学院大学教授)

発表:シャーウッド岩館あけみ

(法政大学大学院)

第2発表(13:15~13:55)

『『ドラキュラ』と「家庭の天使」という倒錯者』

司会:田中裕介

(青山学院大学教授)

発表:原雅樹

(広島市立大学講師)

第3発表(14:00~14:40)

『ギヤスケル・ミーティヤード・ディケンズ』

司会:田村真奈美

(日本大学教授)

発表:閑田朋子

(日本大学教授)

第2室

第1発表(12:30~13:10)

『「何もしないのが肝心」:オスカー・ワイルドに
おける怠惰な知のスタイル』

司会:原田範行

(慶應義塾大学教授)

発表:石川大智

(慶應義塾大学助教)

第2発表(13:15~13:55)

『皮肉と風刺のヘンリー・ライクロフト』

司会:原田範行

(慶應義塾大学教授)

発表:中妻結

(東京女子大学非常勤講師)

第3発表(発表なし)

=====**休憩(14:40~15:00)**=====

シンポジウム(15:00~17:40 第1室で開催)

「現代を生きる19世紀イギリスの作家たち」

司会・講師: 川端康雄(日本女子大学教授)

講師: 大野龍浩(立正大学教授)

新井潤美(東京大学教授)

金谷益道(同志社大学教授)

研究発表要旨

第1室 第1発表(12:30~13:10)

『サイラス・マーナー』における農村共同体とイングリッシュネス

シャーウッド 岩館 あけみ
(法政大学大学院)

本発表は、ジョージ・エリオット(1819-1880)の *Silas Marner* (1861)をコミュニティ論と田園主義的イングリッシュネスの観点から考察し、その接点を探ることを目的とした。主人公サイラスが、イングランド北部の故郷ランタン・ヤードでの辛かった過去を乗り越え再生できたのは、新しく住み着いた村ラヴィロウの共同体との親交によるものであった。2つの村それぞれの環境、宗教、共同体を比較分析し、前者がコミュニティ・メンバーを排斥するのに対し、後者はメンバーの苦難を皆のものとして考える共感のコミュニティであることを指摘した。また、同時代の作家チャールズ・ディケンズ (1812-1870)の *Great Expectations* (1860-1)に描かれた都市の共同体との比較も試み、ヴィクトリア時代が進むにつれてお金を通しての人間関係が拡大していった都会の現実を明らかにした。エリオットの作品が当時の社会でメッセージ性を持つのは、イギリス全体が都市化されている中で、いまだ人々が互いに寄り添い協力し合う農村社会が存在しているからであろう。こうした農村共同体こそが、イングランドのナショナル・アイデンティティとされるイングリッシュネスを形づくる中枢となっていると考えることができる。

第1室 第2発表(13:15~13:55)

『ドラキュラ』と「家庭の天使」という倒錯者

原 雅樹
(広島市立大学講師)

ブラム・ストーカー『ドラキュラ』(1897)において、ドラキュラがいかに家庭における再生産から逸脱する倒錯的なセクシュアリティを体現しているかということは、クィア批評によって議論されてきた。だが、本発表で論じるように、彼と同等かそれ以上にラディカルなのは、意外なことに、「家庭の天使」としてふるまうミーナなのだ。彼女はドラキュラ殺害において重要な役割を果たす一方で、彼を憐れんで同情する発言を繰り返してもいる。彼女の母性愛は「怪物」である彼に対しても向けられているように見えるのだ。さらに、彼女は彼について残された多種多様な記録を物語のかたちに編集し、そのコピーを作った人物でもある。作品世界において彼の存在は、オリジナルの記録が燃えてなくなってしまう以上、そのコピーによって後世に伝えられることになり、また、現実世界において読者は形式上そのコピーを読んでいることになる。ミーナこそが『ドラキュラ』を産む母なのだ。

第1室第3発表(14:00~14:40)

ギヤスケル・ミーティヤード・ディケンズ

閑田 朋子

(日本大学教授)

エリザベス・ギヤスケルの作家としての出発点が、『ハウイツツ・ジャーナル』に寄稿した3篇の短編小説であったことは、よく知られている。同じように本誌を起点に本格的に活動を始めた作家に、イライザ・ミーティヤードがいる。彼女の名は、現在ほとんど記憶に留められていない。だが当時は、ディケンズやサッカレーと肩を並べて『著名人の肖像』に紹介された作家であった。そしてディケンズの作品には、彼女の短編からヒントを得て描かれたと推測せざるを得ないほど酷似した場面がある。

ミーティヤードとギヤスケルは、寄稿先の雑誌も、扱ったテーマも重複している。二人には共通の知人も多い。だがミーティヤードはディケンズの編集する雑誌に寄稿を希望したがかなえられず、ギヤスケルはシェヘラザードに譬えられるほどにディケンズから評価された。本発表では、ディケンズとの距離を視野に入れつつ、この二人の作家の違いを探ることによって浮き上がる人間模様に目を凝らしたい。

第2室 第1発表(12:30~13:10)

「何もしないのが肝心」:オスカー・ワイルドにおける怠惰な知のスタイル

石川 大智

(慶應義塾大学助教)

ウォルター・ペイターは *Studies in the History of the Renaissance* 刊行の翌年、1874年に発表されたワーズワス論において、人生の目的は行動(action)ではなく観照(contemplation)にあり、「為すこと」(doing)よりも「あること」(being)にあると述べ、世紀後半を特徴付ける英国唯美主義の精神の在処を示した(*Appreciations*, p. 62)。

本発表では、同年にオクスフォード大学へ入学し、ペイター美学の洗礼を受けたオスカー・ワイルド(1854-1900)が、いかに上記のテーマを「怠惰」(laziness)や「無為」(idleness)といったモチーフの中で消化(昇華)しようとしたのか、そのラディカルな知の技法を明らかにする。それはいわば、自らの対話篇(‘The Critic as Artist’)に‘with some remarks on the importance of doing nothing’という副題を付し、他方で喜劇 *The Importance of Being Earnest* を世に問うワイルドの逆説に潜む「政治性」を炙り出す作業でもある。発表では、「怠惰」や「無為」に関連する歴史的・批評的文献にも言及しながら、*The Soul of Man under Socialism* (1891)や *Intentions* (1891)を含むテキストの分析を行い、その精神史的な位置付けも考えたい。

第2室 第2発表(13:15~13:55)

皮肉と風刺のヘンリー・ライクロフト

中妻 結

(東京女子大学非常勤講師)

本発表では、ジョージ・ギッシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』における皮肉と風刺の効果について論じる。この作品は、都会のロンドンでの貧乏と不健康な日々から、偶然転がり込んできた年金のおかげでイギリスの田舎で余生を送ることになった作家が書き散らした雑記を、「編集者」が四季の順に並び替えて出版した、という体裁をとっている。これまで議論されてきたように、ギッシングが自身のペルソナとしてのライクロフトに晩年を語らせたとも言われるが、Preface によってこの作品はライクロフトという虚構の人物が日常的に書き綴った雑記を、虚構の編集者がまとめた、構成された一連の文書であることが明らかである。静謐や諦観という言葉で言い表されることが多いこの作品だが、各セクションを一連の流れとして読むと、ライクロフトの頭の中はいつも忙しい。現在得ることができている田舎での穏やかな暮らしの中に理想・幻想・憧憬を見出そうとしながらも、ライクロフトは自分の理想像を潰そうと次々と頭に浮かびあがる苦いが豊かなロンドンの日々の思い出と対峙しているからだ。ロンドンで辛酸をなめつくした日々を生き、今や理想的な安穩とした隠遁者の田舎暮らしを手に入れたものの、「半端もの」として生きてきたロンドンは日常と現実を生きる生き生きとした場所だったの。だからこそ、彼は繰り返し田舎の理想の中にロンドン生活を対比させ、今の自分を皮肉を込めて描写しているのではないだろうか。同時に、この理想の田舎暮らしでは、新聞も読みたくないほどに日常的な生活から離れていたいと言いながら、例えば「この 10 年」におけるインやホテルといった宿泊施設の質の低下を大変な情熱を込めてしたためたり、道で出会った 6 ペンスを無くした少年の心持に同情したりと、理想の中に囚われていたいという欲望は、より強い社会風刺に場所を譲る。ディケンズほどのユーモア溢れる物書きではないと評されるギッシングであるが、『私記』を詳細に読んでいくと、驚くほど「面白おかしい」描写に出会うことがある。本発表では、社会風刺、皮肉、相反する現実世界(日常)と理想、をキーワードに『ヘンリー・ライクロフトの私記』を論じたい。

シンポジウム要旨

(15:00～17:40 第1室で開催)

現代を生きる 19 世紀イギリスの作家たち

本シンポジウムは、19 世紀イギリス文学合同研究会(準備会)に参加した各学会が中心として研究する作家あるいはその周辺の作家について、その特質を 19 世紀という時代と関連づけて考えることを狙いとする。19 世紀初頭と世紀末とでは、産業化や都市化の進展などをふくめ時代状況や社会意識の懸隔が大きくあり、100 年という長いタイムスパンのなかで個別の作家たちをひとくくりにして考察するのが難しいことは言うまでもない。とはいえ、120-220 年後の見晴らしのよい地点に立ち、ジョージ 3 世時代から摂政時代、そしてヴィクトリア朝時代をとおしての 1 世紀間に産出された言語芸術の精華を、またそれらを生み出した作家たちの思想を、個別作家学会の枠をひとまず外したところで再検討し、彼ら彼女らの生涯と仕事がいまの私たちにどのように関わるのかを見出そうと試みることには、一定の意義があるように思われる。4 つの学会を代表して登壇する報告者の報告は、必然的に選択的、部分的なものとならざるを得ないが、合同研究会という集まりのなかで 19 世紀という視野から作家とその作品を見て、新たな光を当てられるような議論ができればと思う。

A Scriptural View of Adultery in the 19th-Century British Fiction

大野 龍浩(日本ギヤスケル協会)

(立正大学教授)

19世紀イギリス小説はキリスト教をどう捉えてきたのか。預言者 Moses(1393-1273BC)を通して神より人類に与えられた十戒。キリスト教道德の具体例としてその第7条——“Thou shalt not commit adultery”(Exod. 20.14)——を取り上げ、Jane Austen から Thomas Hardy までの主だった小説に描かれた adultery をこの観点から検証することによって、「真理」から「懐疑」を経て「批判」へと衰退する信仰のありようを跡づける。同時に、時を経ても変わらないもの存在を指摘する。取り上げる予定の作品は、*Mansfield Park* (1814)、*Oliver Twist* (1838)、*Jane Eyre* (1847)、*The Tenant of Wildfell Hall* (1848)、*Ruth* (1853)、*The Mill on the Floss* (1860)、*The Picture of Dorian Gray* (1890)、*Jude the Obscure* (1895) である。

‘The young gentleman’ ——チャールズ・ディケンズと「階級」

新井 潤美(ディケンズ・フェロウシップ日本支部)

(東京大学教授)

ディケンズの友人のジョン・フォースターがディケンズの死後に発表した伝記『チャールズ・ディケンズの生涯』(1874年完成)には、ディケンズが子供の頃に父親が債務者刑務所に入れられ、自分は靴墨工場で働かされていたという、それまで当時の読者に知られていなかった情報が書かれている。フォースターは最初から『デイヴィッド・コパフィールド』の主人公とディケンズの姿を重ね、いかにこの作品が「自伝的」であるかを強調している。そうすることによってディケンズの階級がデイヴィッドの階級と重ね合わされ、それまで伝記的事実がほとんど知られていなかったディケンズが、自らの作中人物の多くと同様、「不幸な境遇に陥った紳士」であるというイメージが形成される。本発表では『デイヴィッド・コパフィールド』をはじめとするいくつかの作品を参照しながらこのイメージ形成の過程を考察し、十九世紀イギリスの文筆家と「階級」のイメージの関係にも目を向けていきたい。

トマス・ハーディと19世紀の表象観——生理学・認識論・絵画

金谷 益道(日本ハーディ協会)

(同志社大学教授)

ハーディは、晩年『現代合理主義者人名辞典』への収録を、自分は矛盾だらけの非合理主義者であるからという理由で断った。ハーディのこの自己評価に賛同する批評家は少なくない。彼の「印象」や「無意識」への関心にモダニティーを嗅ぎ付け賞賛したV・ウルフも、彼を(普遍の描出を担う)「詩人」でありながら同時に「リアリスト」であったと評し、その小説を互いにベクトルが異なる創作理念の闘技場と捉えていた。矛盾する理念の同時的交錯がハーディ小説の特徴であるのは確かだが、作家と表象の関係の問題に関しては、作家/観察者は、その身体に埋め込まれた諸要素が因子となり対象を歪曲させた表象しか産み出せない、といった見解にハーディは徐々に固執するようになったと思われる。このような身体性を軸とした新しい表象観は、19世紀の科学的、哲学的、美学的言説の中に多く見出せる。本発表では、『森林地の人々』でも言及されている生理学、先験哲学、そして芸術(特に絵画)の領域での新たな発見や実践がハーディの表象観に及ぼした影響や、プラトンのアイデアを女性に追い求め挫折する彼のストック・キャラクターと新しい表象観との関連性などの検討を試みる。

オスカー・ワイルドとアーツ・アンド・クラフツ運動

川端 康雄(日本ワイルド協会)

(日本女子大学教授)

ワイルドの作家としての主たる活動期にあたる 1880 年代から 1890 年代は、アーツ・アンド・クラフツ運動が興隆した時期と重なる。ウィリアム・モリスの 1860 年代以来の装飾芸術の実践を直接の影響源とするその運動にワイルドは深い関心を寄せていた。じっさい、1888 年秋にロンドンで第 1 回アーツ・アンド・クラフツ展覧会が開催された際、5 回にわたって開かれた連続講演のすべてをワイルドは聴講し、その紹介記事を『ペル・メル・ガゼット』紙に発表している。タペストリー織について実技をまじえて講じたモリス、幻灯スライドで見本を示しつつ初期印刷者を語ったエマリー・ウォーカー、またコブデン＝サンダースンの装幀論など、アーツ・アンド・クラフツ運動史のなかで特筆されるイベントにワイルドは居合わせていたのであり、その一点だけでもワイルドはこの運動の同伴者であったとみなすことができる。ではそうした関心が、また明らかにモリスらと共有するデザイン思想が、ワイルドの『虚言の衰退』などの批評、また『ドリアン・グレイの肖像』などのフィクションにどのように描出されているか、本発表ではこれを検討してみたい。